

<第1回日本レジャー・レクリエーション学会賞 研究奨励賞—論文部門>

現代日本社会の親密性における自己開示の条件に関する考察

— 広島県西部のトライアスロン競技愛好者の事例から —

浜田雄介<sup>1</sup>

A case study of the requirements for self-disclosure in relation to  
intimacy within contemporary Japanese society

— Triathletes in West Hiroshima prefecture —

Yusuke Hamada<sup>1</sup>

はじめに、第1回日本レジャー・レクリエーション学会賞（研究奨励賞—論文部門—）という素晴らしい賞をいただき、関係の皆様には厚く御礼を申し上げます。

本論文はトライアスロン競技愛好者（トライアスリート）の事例を取り扱った。なぜトライアスリートがレジャー・レクリエーション研究の対象なのかということについて補足しておく。トライアスロンというと、一般には肉体的にも精神的にも過酷なスポーツとして認識されている。実際に競技は長時間に渡る厳しいものであり、そのためトライアスリートは日々多くの時間と労力を、トレーニングなど競技に関連する実践に費やしている。こうしたことから、トライアスロンはレジャーあるいはレクリエーションという言葉から想起されるイメージとは一線を画したもののよう受け取られるかもしれない。

Atkinson<sup>2)</sup>によれば、トライアスロンに付随する苦しさを乗り越える経験や、継続的なトレーニングの実践は、トライアスリートにとって社会的不安や倦怠感に取り巻かれた日常を変え、自己肯定感をもたらす源泉となる。このことが、「1. 本稿の目的」で述べた「自分とは何か」という問いとともに現代日本社会で高まっているとされる自らに固有な価値規範に沿って「自分らしく」あるとすること（「自律」）への意識に対して、ト

ライアスロンが果たすと目される機能である。こうしたトライアスロンの機能は Stebbins<sup>3)</sup>のいう自己実現を可能とするレジャー活動を指す「シリアスレジャー」の概念に符合しているといえる。トライアスロンという余暇活動への真剣な取り組みを以って、それぞれに指針を獲得していくトライアスリートのあり方は、レジャー・レクリエーション研究の題材として有意な事象と考えられる。

トライアスロンが個々人にとって重要な実践であるがゆえに、トライアスロンを通じて築かれる他者関係もまた非常に重要なものとなる。トライアスロンは個人競技ではあるが、連れ立っての大会参加や活動上のサポートなど、トライアスリートは決して「1人」で競技しているのではない。「仲間」と呼ばれるトライアスリート同士の結びつきにおいて、対象者は互いを実践上の重要な他者として認識しており、関係の良好さが窺われた。「2. 親密圏における他者とのジレンマ」でみたように、「自律」に向かううえで他者の存在は非常に重要なものとなる。しかし「自分らしく」あるとすることは、同時に関係上の自他の軋轢を引き起こしかねない。そこで本論文では自己に関するメッセージを発信し、他者に肯定、受容してもらうことで、他者に対する信頼を得る営為である「自己開示」を方法論的視点として、トライア

スリートの「仲間」関係の事例から、自他の相克を乗り越えた他者関係形成の条件を探った。

「3.(3) 代表的な実践の場のあり方」で述べたトライアスリート同士の親密さの深浅の差異および「4.(1) 承認されないという経験」における「自分らしさ」を阻害するチームへの忌避というそれぞれの事例は、単にトライアスロンという特定の文脈にもとづいた枠組のみで人々をつなぎとめることとは異なる関係が求められていることを示唆している。次いで「4.(2) 意味ある他者による承認」および「4.(3) 異質性の受容と他者への関心」で挙げた事例から、自他の異なる志向を承認し合うことが、他者とのジレンマを回避するとともに、「仲間」関係上での信頼醸成の契機となる「自己開示」を可能にしていると考えられた。したがって、対象となったトライアスリート同士の親密性は、多様な主体性のあり方を認め、自他を同定しないような関係の仕方として結論された。

「仲間」関係の構築は、集会的、同質的な我々というアイデンティティによる社会化の機能が解体され、自分たちの行なっていることを個人自らが意味づけなければならず、そのために自他の差異を前提とした関係へと移行している社会状況<sup>1)</sup>のもとで、人々が新たな居場所を作ろうとする動きとして見受けられる。「5.(2) 今後の課題」において、誰もが参加可能な練習会の規模が拡大傾向にあり、そのような余暇活動の場の内実について分析することを課題として挙げた。本来、社会的な役割や責任から離れた場所で主体的に行われるはずのレジャー・レクリエーション活動、特に自己実現に向かう実践である「シリアスレジャー」の圏域から主体性が剥離されてしまわぬよう、

各々の「自律」した」志向が担保される実践の場を多くの人が求めているのではないだろうか。いくつかのトライアスロンクラブ主催の練習会が別のクラブあるいは組織の外部にいる「仲間」のような人々に向けても開かれ、それを契機として多くのトライアスリートのあいだで盛んな交流が行われている。このことから、トライアスリートの多様な交歓にもとづいた親密性構築の機会の拡がりが展望される。

本論文のなかで議論が十分にできなかったのは、異なる主体性を承認し合うことを自己開示の条件とした親密な関係生成の現場のダイナミズムについてである。本論文「仲間」関係における自己開示の条件を提示するに留まった。今後はそのような条件を基底とした関係構築の契機から相互に信頼を醸成していく過程について、トライアスリートの生きられた経験を通じて描写することで、「シリアスレジャー」活動への継続的な参加要因に対する自他関係の意義をつまびらかにできるのではないかと期待している。今回の受賞を糧として、研究活動に一層励んでいく所存である。

## 文献

- 1) 濱西栄司、集会的アイデンティティから経験運動へ—トウレーヌ学派モデル／社会学的介入による LETS・変容の事例分析—、ソシオロジ 154 : 69-85、2005
- 2) Michael Atkinson, Triathlon, suffering and exciting significance, Leisure Studies 27(2) : 165-180, 2008
- 3) Robert Stebbins, Serious Leisure: A Perspective for Our Time, Transaction, 2007